

■しまゆむた

沖永良部島の高倉調査

川上 忠志（南日本新聞和泊販売所所長）

南西諸島には伝統的建造物の高倉がある。（昔は豊富にあった）高倉は貯蔵する穀物を高温多湿な南国の気候による湿気や、ネズミ等の害虫から守る役目がある。又、豊かさの象徴としてその家の誇りでもあり、稲作に対する尊敬と愛着があった。沖永良部地方でも1960年代から始まる復興事業による公共投資は農業構造にも変化をもたらした。テレビ中継の始まり、島外からの情報流入や船舶航路の充実、航空機の就航によるスピード化等々。又、国の甘味資源政策と米の生産調整が連携されたのか、大型製糖工場の進出、稲作の転換とサトウキビの増産推進により、水田はキビ畑に徐々に変化していった。

大型製糖工場の進出は、それまでのんびりと牛馬の労力に頼っていた家内工業的な砂糖小屋や、農協などが設立した30トン工場なども淘汰した。過剰となった労働力は日本の高度成長期と重なり都会に吸収され、島の過疎化に拍車をかける結果になっていった。

このような農業構造の変化は文明社会の到来でもあるが、燃料の薪がガスに変わり、ほぼ自給していた穀物も移入に頼らなければならなくなると、島民は現金収入を得ようとキビ作、畜産、輸送野菜、花卉栽培へと転換進化した。80年代に入ると水田はほとんど姿を消して「高倉は無用の長物」となった。

現在、沖永良部島では経済的稲作栽培は無い。大城小学校での10アールほどの教育用栽培のみである。他の学校の子供達は農業の島にありながら、主食である稲を知らないだろうし、高倉などへの興味は少ないだろうと思う。

2000年3月、知名町余多川に架かる天竜

橋完成の時、橋の欄干の親柱に高倉の絵が刻まれたが、地域の住民から「高倉がちよっと変だ」との声があがった。取材中に見てみたところ、島の高倉には似つかない絵が描かれていた。それは、古代ギリシャのパルテノン神殿を思わせるような長い柱で、高倉を支える貫（柱の横木、これを抜いたら高倉は簡単に倒れる）が無いものであった。（平成12年3月25日付、南日本新聞）



和泊歴史民俗資料館 カヤ葺きの高倉

余多地区は田が余るほどと言われた穀倉地帯で、高倉も点在している。その後、地元住民の要望を取り入れ、県土木事務所が手直しすることになった。それほどまでに高倉があったということだろう。その事がきっかけとなり、高倉調査を思いついた。調査をして思ったことは、高倉の保存は大変難儀なものだということである。白蟻被害や台風による倒壊、過疎化に伴う持ち主不在による管理不足等により、近い将来消滅の危機もある。そういう意味では、橋の欄干の絵でも後世に正確なものを残すのは当然と言える。

2000年の調査では、民家がカヤ葺きから

トタン葺きになると共に、高倉も多くがトタン葺きや瓦葺きになった。沖永良部島で47棟が残っていた、昔ながらのカヤ葺きは和泊町歴史民俗資料館庭と知名町自然休養村センター庭の2棟だけ、残りは瓦葺き2棟とトタン葺きである。しかし僅か4年経った現在では、33棟に減少、コロニアルなどの新建材葺きの高倉も出現した。和泊町に21棟、知名町に12棟ある。その中でも奄美大島からシイやイジュの木の材木を取り寄せて作ったり、高倉を移築したものは白蟻に強く、何百年も建っているものもある。しかし島の松材で作ったものは白蟻被害に悩まされている。

白蟻だけでなく、過疎化による持ち主不在や台風も痛い。知名町久志検のある家の高倉は、先月の台風で傾いた。島外にいる持ち主に処理をどうするかと話し合っている。次の台風が来たらおそらく倒壊するだろう。祖先たちが残した文化遺産は次々と消滅していく。これも世の流れだろうか、惜しいものだ。



知名町余多川 天竜橋の高倉の絵

さて、沖永良部島での稲作はいつ頃始まったか定かでないが、西村サキさんの著書によれば「この島の稲作は溜池灌漑に頼るもの、最古の溜池設置が1770年頃、屋子母村と言われているが、島の稲作はそれ以前から行われていたと推測される。余多川流域や越山流域などでは溜池灌漑以前から稲作があったのでは・・・」とある。

1952年(昭和27)頃の調査によれば全島の田地総面積は6百町歩、その内2百町歩は余多川と越山流域の田地であり、残りの4百町歩が溜池灌漑の田地である。

稲の収穫が終わるとムニシードウ(粳調製場)から俵を運び、高倉のある家では蔵揚げをする。その夜はムニシージュージ(収穫祝)の宴が盛んに行われる。酒や料理がふるまわれ、三味線を弾き、唄い踊り夜がふけるまで酒宴が開かれるのである。

わが家は貧乏であったので高倉は無い。昭和の始めの頃、父がフジチ山のせいで難病になった。ユタの進言で田畑を売り3百3拾3円のお金を作り燃やして父を救った。それ以来貧乏になったので、高倉に俵を運んだことはない。私が中学生の頃までは米作りもしていた。一期作は何とか採れても二期作は天任せだ。溜池で夜を呈してミジクミャギー(溜池でイビに水を汲み上げ水路を伝わって水田に流れる)をした。大変難儀な仕事だった。流水のほとんど無い島北部の和泊町国頭集落はこの難儀から解放されるように転作奨励前にキビ作に走ったため、転作奨励金は無い。



ミジクミャギーの様子(和泊町手手知名)

野村孝文氏の著書「南西諸島の民家」によると「奄美群島の民家は一般に粗末であるが高倉だけは際立って堂々としている」と述べ、奄美大島では稲を稲加那志（イネガナシ）と尊称している。（それは沖永良部でも同じ）高倉は床組の型式によってハナ倉とサシ倉に大別できる。ハナ倉は奄美大島や喜界島、徳之島に広く分布し、サシ倉は徳之島や沖永良部、与論島に分布する。又、構造や型式により奄美式高倉と沖縄式高倉があり、奄美から南下するに随って沖縄式に近づいていき、与論に至っては全く沖縄式となっていると述べている。（現在の沖永良部島の高倉は大和村や住用村などからの移入高倉が白蟻被害に強く、島の松材の高倉よりも残り多く、ハナ倉が多い）



持ち主不在の高倉（和泊町古里）
白蟻の被害にあっている

平成2年に発行された「鹿児島県文化財調査報告書」によると、高倉には4本柱や6本柱、7本柱、9本柱がある。（現在、沖永良部の7本柱は消滅した）昭和43年の調査では1543棟（トタン葺き含む）が記録されているが、昭和46年には1142棟と3年間に約400棟が無くなっている。（沖永良部の戦前戦後の高倉数は推定で約800棟以上あった）「わが国が稲作民族国家であることを考慮する時、南西諸島を中心とする高倉の存在は極めて貴重なものである」と述べているが、県として

何らかの対策を立ててほしいものだ。



沖縄に寄贈された高倉
座喜味城（ハナ倉）

沖永良部島の高倉は各個人の家々の庭先に建っている。その為に屋敷が狭く、撤去されてしまう。大和村の「群倉」のように集団ではない。薩摩藩時代に畦布村の貯蔵役の屋敷には幾つもの高倉があったと伝わるが、詳しい調査がまだされていないのが現状である。

南西諸島から鹿児島市や神戸市、岐阜県など、全国各地に高倉は移住した。沖永良部島からは、先の戦災で高倉がほとんど消滅した沖縄に渡っている。沖縄県立博物館や沖縄国際大学などに、又、琉球戦国時代の武将護佐丸が沖永良部島や与論島から人夫を強制的に連れて行って築城したと言われる読谷村の座喜味城庭にも沖永良部島から寄贈され、稲作の歴史と文化を伝えている。

参考文献

- 鹿児島県文化財調査報告書「離島編」
- 野村孝文氏著書「南西諸島の民家」
- 西村サキ氏著書「沖永良部島民生活誌」